

嫂

市川の某それしという家で先の男の気性も知れているに財産も戸村の家に倍以上であり、それで向うから民子を強たつての所望、媒な妁ご人どというのも戸村が世話になる人である、是非やりたい是非往むかつてくれということになった。民子はどうしてもいやだと云う。民子のいやだという精神せいしんはよく判わかっているけれど、政夫さんの方は年も違い先の永いことだから、どうしても某の家へやりたいとは、戸村の人達は勿論親類までの希望であった。それでいよいよ斎藤のおツ母さんに意見をして貰もらうということに相談が極り、それで家のお母さんが民子に幾度意見をしてもらって泣いてばかり承知しないから、とどのつまり、お前がそう剛情はるのも政夫の処ところへきたい考えからだろうけれど、それはこの母が不承知でならないよ、お前はそれでも今度の縁談が不承知か。こんな風に言われたから、民子はすっかり自分をあきらめたらしく、とうとう皆様のよい様にと行って承知をした。それからは何もかも他の言ことうなりになって、霜月半なつかばに祝儀をしたけれど、民子の心持がほんとうの承知でないから、向うでもいくらかいや気になり、民子は身持になつたが、六月むつきでおりてしまった。跡の肥立ちが非常に悪くついに六月十九日に息を引き取った。家のお母さんは民子が未だ口をきく時から、市川へ往つて居つて、民子がいけなくなると、もう泣いて泣いて泣きぬいた。一口まぜに、民子は私が殺した様なものだ、とばかりいつて居て、市川へ置いたではどうなるか知れぬという訣わけから、昨日車で家へ送られてきたのだ。民子も可哀相だしお母さんも可哀相だし、政夫さん、どうしたらよいでしょう。